

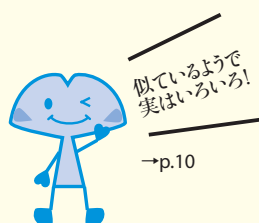
学内広報

2024.11.25

no.1588



[Whole Teidai Gesui Catalog] (あんどやすし)



UTokyo Compass実現へ向けて
授業料改定について総長に聞く

23回目を迎えたオール東大の祭典
ホームカミングデイ 2024

科学の明日をみつける秋の2日間
柏キャンパス一般公開

UTokyo Compass 実現へ向けて

授業料改定の決断について、総長に聞く

9月24日に発表した「授業料改定及び学生支援の拡充について」。UTokyo Compassを軸として「世界の誰もが来たくなる大学」の実現を目指すなかでの施策の一つでしたが、学内外の皆さんから大きな反響を呼びました。大学運営の舵取り役として決定に至った経緯と今後の展開について、藤井輝夫総長自身の言葉でご紹介いただきます。

聞き手／杉山清彦(広報室長)



教育学修環境改善のために

——UTokyo Compassのもとで今回の改定に至った経緯をお話してください。

東京大学が「世界の誰もが来たくなる大学」になるには、学生の教育学修環境の充実が不可欠です。それには資金が必要で、大学がしっかりした財務基盤を築かなければなりません。私たちは財務経営本部（現・CFOオフィス）を3年前に立ち上げ、大学の財務について議論してきました。この検討のなかで選択肢として浮上したのが、20年間据え置かれてきた授業料の改定です。この間、運営費交付金の漸減に加え、光熱費や物価の上昇が進んでいます。そうした状況も踏まえ、授業料改定が必要だと考えました。

世界の高等教育の状況を見ると、コロナ禍を経て、デジタルツールを含む新しい学びの環境の整備が進んでいます。東大が現状のままでよいとは考えられません。いま改定することによって得られる増収分を、学びの環境の向上に投資することが必要との判断に至りました。

——現在の教育学修環境のどのような点が不十分と感じていますか。

デジタル環境の整備の推進が急務です。学生が自分で授業の履修や授業以外の学びについて設計・管理できるUTONE^{*1}の導入を進めている最中ですが、動作環境がまだ完全な形に至らず、対象もPEAK生限定という試用の段階です。これを充実させて全学に広げる必要があります。

また、自分の端末をキャンパスに持ち込んで学ぶ際、構内のどこでもセキュリティ度の高いネットワークが使えなければなりませんし、教室内のコンセントやモバイルバッテリーの貸し出しなども増強し、DXに伴うソフトウェアやツールの使用環境を充実させないといけません。

それから、体験型活動の充実も課題の一つです。理想的な学びという点では、多様な声を聞く力をつけることや、経験を通しての学びが重要で、それには体験型のプログラムが効果的です。教室内の学びだけでなく、教室外の学びにより多くの方に参加していただきたい。FS^{*2}のように全国の自治体で行うものや、海外に行って体験するものだと、どうしても自己負担分が増えます。大学側のサポートを手厚くして、経済的な理由で参加できない学生を減らし、もっと多くの学生が参加できるようにしたいのです。

相談機能の強化も必要です。今回、学生の声を聞いてみて、経済的な見通しが立たないために学修の時間が圧迫されるという困難を抱える人が一定数いるとあらためて知りました。そうした学生が経

済面の相談に来やすい窓口を強化したいと考えています。メンタルヘルスのケアの体制も喫緊の課題です。学生支援の一環と捉え、窓口等での対応を強化することを考えています。

多様な視野の涵養という点では、国際面も重要です。グローバル教育センター（GlobE）のグローバル教養科目^{*3}を増やし、少人数のクラスでよりきめ細かく対応するには、教員・スタッフの拡充が必須。海外で体験するプログラムや留学の支援の拡充も重要です。他にも、開館時間延長や資料の充実など図書館機能の強化、授業の質を高めるために必須となるTAの処遇改善も必要です。

——改定と同時に、授業料免除対象を拡大したり博士課程を対象外にするなどの措置も打ち出しています。改定による増収は施策の実現に十分でしょうか。

改定による増収分は年に約13.5億円^{*4}で、先に述べた教育学修環境の充実はそれだけでは賄えません。しかし、授業料が20年間据え置きだったことは、学修環

当面の間、取り組む事項	今後想定される必要額/年間	授業料改定活用額/年間
○学修情報の可視化・全学の学修環境の整備 … 学修支援システム等の機能強化、学修履歴・在学時の活動履歴の可視化、各種学修用ソフトウェアの充実 など	66億円	6.2億円
○学修基盤の強化・充実 … TAの処遇改善、施設・設備の維持・改修 など	51億円	4.8億円
○専門分野を超えた学術資産活用の強化 … 図書館機能の強化、学術資料等の充実 など	16億円	1.5億円
○インクルーシブキャンパスの実現 … 経済的相談機能強化、各種バリアフリー強化、メンタルヘルスケアの充実 など	7億円	0.7億円
○グローバル体験等の強化・拡充 … 海外留学のための奨学金、グローバル教養科目の増設 など	3億円	0.3億円

※額は現時点での概算

9月24日発表資料「教育学修環境改善に向けて当面の間取り組み事項」より。「授業料改定の増収額を活用して、全ての学生が来てよかったと思える理想の教育学修環境の実現を目指します」(総長)

境改善に充てられたはずの財源が入ってこなかったということでもあり、増収分は遅れを取り戻すための取り組みに充てていきます。考え方として、増収分と免除措置のための必要額とは差し引きで考えるのではなく、授業料免除は学生支援のための支出の一環と位置づけています。

政府への働きかけが形に

——財務面で苦しいのは他大も同じです。東大が先頭に立って政府に働きかけるべきだという声も聞こえてきます。

国立大学全体の問題については、国立大学協会（国大協）から働きかけるのが筋です。もちろん国大協はずっと要請を行っており、今年は「もう限界です」というメッセージも出しました^{※5}。ただ、文科省の予算は高等教育だけでなく初等・中等教育も含めた総合的な枠組みで議論されるので、働きかけは続けていますが思うようにはいかず、辛うじて「下げ止まり」の状態というのが現状です。

もちろん東大としても常に文科省に強い要望を伝えてきました。授業料の標準額や運営費交付金のあり方も含め、高等教育を社会全体でどう支えるのかという大きな議論が必要です。国立大学への支援強化だけを主張しても説得力は弱いというのが現状だと認識しています。

個々の大学ができるのは財源の多様化です。産業界との連携、寄付集めの強化といった部分ががんばりどころです。UTokyo Compassに記したように、東大は補助金型からエンダウメント型へ経営モデルのシフトを図っています。国立大学の基金制度改革を政府に働きかけてきたことが実り、会計基準が緩和され、今年

度から大学運営基金の創設が可能になりました^{※6}。従来は寄付金の積み上げ以外は年度ごとの会計処理が前提で、予算を次年度に繰り越せない仕組みでした。これが、自己収入の一部を積み立ててよいことになり、大学運営基金として積算できるようになったのです。基金の運用で得た収益の一部を教育研究活動に使ったり、元本を増やすのにも使えることになりました。これは国立大学の財政を充実させる重要な手立てとなります。東大が文科省をはじめとする政府側に3年前から働きかけを続けてきたのが実ったものといえます。

また、大学債の使途の柔軟化にも取り組みました。これは従来、施設・設備整備といったいわゆるハード面に使途が限られていました。現在、この制限が緩和され、初期費用に対するものという制限はあるものの、教育研究の施設・設備整備に付随するソフト面にも使つてよいことになりました。これも東大が働きかけてきたことが実ったものです。

課題はコミュニケーション

——本学は最も多くの運営費交付金を受けています。他大が授業料を上げずにこらえているのに東大は上げるのか、自助努力は十分なのかという声もあります。

東大は日本の大学で最大級の規模を擁します。学部と大学院を合わせた学生数は国立大学で最多、教職員数も最多^{※7}です。附属施設が全国各地にあり、あらゆる分野の活動が活発で、全体の事業規模が大きく複雑なのです。財政面での自助努力は、前述のように、国立大学の枠組みのなかでできることを広げてきたと自負しています。

——総長対話などを通じて学生の声を

聞いてきました。この件に関する学生の反応についてどう受け止めていますか。

私たちとしては、ある程度案を固めてから構成員に伝えたかったのですが、検討段階の内容が外に出てしまいました。報道を前触れもなく目にして、学生が不信感を抱いたり反発するのは無理もないと思います。感銘を受けたのは、未来の後輩や経済的に困難な仲間を思いやる発想が学生たちから伝わってきたことです。一方で、こういう環境を、こんな学びの機会を、といった前向きな提案があまり聞けなかったのは少し残念です。いずれにせよ、コミュニケーションの進め方に至らぬ点があったと反省しています。しかし、結果論ではありますが、意思決定に声を反映させることにつながった面もあると思います。

また今回の経緯をめぐっては、情報のガバナンスが問われました。全学的なテーマについて、さまざまな声をすくい上げるとともに戦略的に発信するためのコミュニケーション機能の強化が急務です。

——授業料改定に至るまでを振り返って、最後にひとことお願いします。

コミュニケーション不全はあったものの、一連のプロセスを通して、多くの人の意見を聞きながらよい方向に進む一歩を踏み出せたと思います。全額免除・一部免除の区分や経済的相談への対応など、制度面の整理は早急に進めます。一方で、困りごとを具体的に把握して改善につなげるため、学生へのアンケートを実施するとともに、各部局を巡って直接声を聞く懇談会^{※8}を行います。そこで挙がってきた課題と向き合いながら、「世界の誰もが来くなる大学」になるための努力を続けます。

インタビューは10月21日に安田講堂の特別会議室で行われました。



※1 大学総合教育研究センターを中心に検討が進む新学生支援システム（本誌1590号で特集予定）。※2 2017年度に始まったフィールドスタディ型政策協働プログラム。全国各地の自治体に学生チームが赴き、地域が抱える課題解決を目指して取り組んでいます。※3 2023年度に始まった、交換留学生を含む学生が現代社会の喫緊の課題を英語で学ぶ授業。特にSDGsに関する題材を重点的に扱っています。※4 2028年度末時点。※5 6月7日の国立大学協会声明。※6 2021年10月の記者会見で藤井総長が示した経営力強化策の一つが、1000億円規模の法定基金（当時の仮称）創出でした。※7 「2023年国立大学法人基礎資料集」によれば、学生数（学部＋大学院）は、東大が24,849人、阪大が20,980人、京大が20,778人。教職員数は、東大が8,201人、京大が7,377人、阪大が6,885人。※8 学修環境向上のための総長懇談会。

第23回を迎えたオールUTokyoの祭典

ホームカミングデイ2024



10月19日に本郷キャンパスで開催された第23回ホームカミングデイ^{*}。最高気温が30度に達する季節外れの暑さの中、卒業生、在学生、そのご家族、近隣の方など大勢の来場者でキャンパスが賑わいました。周年祝賀式典やワークショップ、講演会、音楽祭、模擬店など、合計118に及ぶ多彩なイベントの一部を紹介します。

スポーツと東大の過去・未来

今年拡充された銀杏並木フェスタには、同窓会団体や文京区の商店街、運動会の各部など計26団体が出店。東大にゆかりのある14歳元の日本酒を試飲できる東大蔵元会のテントにはチケットを求める列ができ、東大三四郎会のワークショップでは子供たちがタルト作りを楽しむ姿が見られました。また、地域同窓会連合会と石川赤門会が共催した能登地震被災支援バザールでは、富山湾のホタルイカ、ノドグロの干物などが並べられ、特産品を何点も購入する人の姿もありました。

午後に安田講堂で開催された150周年記念事業カウントダウンイベント第2回「スポーツと東京大学」では、室伏広治スポーツ庁長官、出口敦執行役・副学長、文書館の中西啓太准教授、医学部の内山咲良専攻医、医学系研究科の鎌田真光講師、教育学研究科の野崎大地教授が登壇し、東大とスポーツのこれまでの関わりや現状、健康増進、データ計測・分析の活用などについて講演を行いました。開会挨拶をした津田敦理事・副学長は、9

月末に完成した指針「東京大学スポーツコンパス」を紹介し、多くの人と対話をしながら3年かけて作り上げたと説明。その過程で構築したネットワークは大きな財産だと語りました。41歳までハンマー投げ選手として活躍した室伏長官は、自身の競技人生やスポーツ庁の「第3期スポーツ基本計画」などについて基調講演を行いました。在学中に三段跳びの選手として全日本学生選手権で優勝した内山先生^{*}は、勉学と競技活動の両立から得られたものについて語りました。その中で、生理時の不安を解消するため女性のユニフォームを水色から黒に変更したことを例に、女性選手の視点から改革を進めた経験についても触れました。

応援歌『ただ一つ』を斉唱

法文1号館では黒田東彦前日銀総裁を迎えて「グローバル経済と日本の課題」と題した有料のシンポジウムを開催。人口動態や気候変動が日本経済に与える影響などを考察しました。また、伊藤謝恩ホールで開催された「赤門音楽祭」には文京区立本郷小学校合唱団やOB・OG合唱団、管弦楽団など計7団体が出演。初出演となった教職員バンド「シム兄とマハロ楽団」は坂本龍一やルイ・アームストロングなどの曲を披露しました。夕方には、安田講堂前広場に多くの卒業生、来場者、藤井輝夫総長、そしてイチ公^{*}も集まり、応援部のリードで東大応援歌『ただ一つ』を斉唱しました (①)。来年は10月18日(土)に開催予定です。



②「スポーツと東京大学」で基調講演を行った室伏広治スポーツ庁長官。③銀杏並木道には計26団体が出店し、終日多くの人で賑わっていました。④「赤門音楽祭」で合唱する東京大学柏葉会合唱団同窓会の皆さん。⑤キャンパス構内には多くの模擬店が出店しました。⑥医学部3号館裏テニスコートでは馬術部による乗馬や餌やり体験も。

その他のイベント(合計118件のごく一部)

オープニングセレモニー・周年祝賀式典・周年懇親会	本部
理学部ホームカミングデイ 家族で体験理学のワンダーランド	理学部
日本列島下のマグマ・流体と変動現象	地震研究所
懐徳館庭園公開	本部
総合図書館見学ツアー	総合図書館
自分でデザインする、自分のキャリア	東大校友会 サポーター

^{*}大学と全学統一同窓会「校友会」との共催

^{*}学生時代の内山先生のインタビュー記事が本誌NO.1529 (2019.12.19) に

^{*}運動会のマスコット



10月25日～26日に行われた柏キャンパス一般公開2024。25日には報道関係者と寄附者の皆様をお招きして4人の先生が解説を行う研究室ツアーも実施しました。ごく一部ではありますが、広報課員が会場を巡って目にした企画の模様を紹介します。

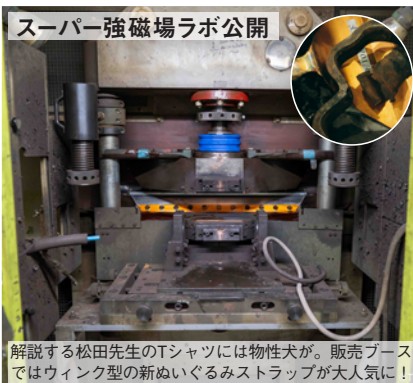
科学の明日をみつける秋の2日間

柏キャンパス一般公開

2024



物性研究所
松田康弘教授



スーパー強磁場ラボ公開

解説する松田先生のTシャツには物性犬が。販売ブースではウィンク型の新しいぐみストラップが大人気に！



氷海造波水槽見学

本来低温の室内が参加者の熱気で適温に!? 外では水が落ちる力で進む模型船の体験も／新領域創成科学研究科

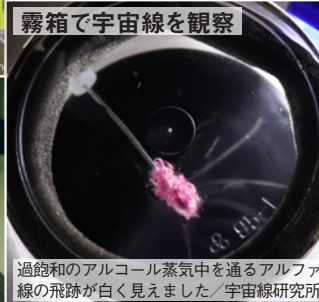


新領域創成科学研究科
早稲田卓爾教授



東京大学演習林の歴史

代々木、府中、樺太、全羅南道、江原道、台湾と今はなき演習林名が残る資料／文書館



霧箱で宇宙線を観察

過飽和のアルコール蒸気中を通るアルファ線の飛跡が白く見えました／宇宙線研究所



サバの寄生虫を見る

サバを捌いてアニサキスを探取る身近な寄生虫体験／新領域創成科学研究科



大気海洋研究所
濱崎恒二教授



バルーンアートと部門展示

深海のスター、チョウチンアンコウとメンダコ。作者はもろん大海研出身の須原三加さん／大気海洋研究所



電気自動車 (EV) の未来を体験

走行中給電実証実験に使われるEV。右上写真のコイルを懸架装置下に搭載しています／新領域創成科学研究科



新領域創成科学研究科
藤本博志教授



たたら製鉄体験

炉の組み立てからケラ（鉄の塊）出しまで昔の製鉄法を解説＆実演／生産技術研究所



テレヤッホーシステム

インターネットで演習林と柏IIをつないだ遠隔やまびこ装置！／情報基盤センター



腕時計型電気刺激装置

微弱電流で指を動かす高橋哲史先生の装置。奇妙な感覚で…／情報基盤センター



チーバくんとごろくろー(?)とラッカ星人

教養教育の現場から

第66回

リベラル・アーツの風

東京大学が全学をあげて推進してきたリベラル・アーツ教育。その実践を担う現場では、いま、次々に新しい取り組みが始まっています。この隔月連載のコラムでは、本学の構成員に知っておいてほしい教養教育の最前線の姿を、現場にいる推進者の皆さんへの取材でお届けします。

ダイバーシティと言語

／D&I部門KOSS(駒場キャンパスSAFER SPACE)の取り組み

英語と「華語」に着目して活動

于 KOSSの活動はジェンダー／セクシュアリティが中心ですが、D&Iの 이슈ではエスニシティや国籍の問題も切り離せません。そこで注目したのが言語で、私たちには二つの問題意識があります。一つは、蓄積されてきたフェミニズムやクィアといった学術的議論のほとんどが英語によるものだったこと。もう一つは、KOSSの活動が現実的に主に日本語話者が対象の前提となっていること。そこで、多様な学生に利用してもらうことを目指して多言語での活動を進め、切口として英語と「華語」に着目しました。

張 「華語」とは、個別な国や民族、あるいは特定の集団を限定せず、差異があるながらも共通に使用できる中華系の言語を強調するために用いている表現です。

于 KOSSでは2022年から英語と華語に対応した開室日も設けています。現在、約15人の院生スタッフが活動しています。その一部は多言語開室を担当しています。

張 私は「華語主題茶話会」を担当しています。今年の4月に実施した回のテーマはSFの意の「科幻」。チラシには世界で大ヒットした小説の『三体』のアンテナをモチーフにデザインしました。過去

には「第三人称」がテーマの回も開催しました。たとえば、男性に「他」、女性に「她」を用いる華語の三人称は欧米の文章を翻訳するために生じたもの。日本の「彼」「彼女」も同様です。三人称の代名詞についてジェンダー構造における権力のアンバランスの面から話しました。

魏 ちなみに繁体字では神を表す三人称の「祂」や動物を表す「牠」があります。

市川 私は学部生スタッフとして今年の新歓ティーパーティーの英語開室を担当しました。日本語はできますが、高校まで海外だったので国内事情に疎く、自分の居場所を探せませんでした。日本語ができない方ならなおさらです。大学でも通称名の使用法とか寮の性別の扱いとか言語の障壁があるとわからない点が多々あります。大学がD&Iを掲げるなら解決すべき部分だと思います。

非英語圏の地域の経験に学ぶ

于 日本語圏・英語圏以外の運動や議論が見えづらく取り上げられる機会が少ないことに鑑みて、北京の同志運動^{*}、台湾の婚姻制度・性別変更をめぐるアクティヴィズムなど、英語圏以外の地域に注目したイベントも開催してきました。

魏 去年4月、台湾伴侶權益推動連盟の

皆さんを招いてトークイベントを行いました。2019年にアジアで初めて同性婚を法制化した台湾で、その実現のために尽力した皆さんです。逐次通訳を自分たちで行いながら、婚姻平等法案起草から国際同性婚、性別変更登録訴訟に至るまでの実際の歩みを話していただきました。

于 これらのKOSSの多言語でのイベントは留学生へのアウトリーチも兼ねていましたが、そこに見落としがあると分かりました。そのきっかけはKOSSが主催したポストイトアクションという活動です。会場に大きなボードを置き、自分のもやもやを付箋に書いて貼り、皆で話し合うもの。その書き込みで、日本人と留学生という分け方ではどちらにも当てはまらない人がいると気づきました。

張 たとえば「留学生と日本人学生の交流会」というより「留学生と国内学生の交流会」のほうが望ましいわけです。

市川 私は名前を見ると日本人と思われるがちですが、中華文化圏の影響を受けて育ちました。日本人と留学生、という二項対立だとこぼれる人がいるというのは、実感としてわかります。

于 日本人がマジョリティの東大において、「日本人」という枠組みを当たり前の前提とすることを超えた、より包摂的な空間作りが、KOSSにとってもこれからの課題になると思います。言語以外の取り組みもこれから探っていきたいです。



院生アドバイザー
魏 韻典

学部生スタッフ
市川友香

D&I部門
特任研究員
于 寧

院生アドバイザー
張 洋宇



①駒場102号館のKOSSにて。②「華語主題茶話会」のチラシ。③台湾アクティヴィズムイベントのチラシ。④中国のフェ

ミニズムが専門の文可依さんが講師を務める6回連続のKOSSクィア理論入門公開講座「近代国家という呪縛：フェミニズムの分断と矛盾」。誰でも参加OK(事前申込制)。

*性的マイノリティの権利獲得運動

教養教育高度化機構(内線:44247)

KOMEX
Komae Office for Multicultural Education

ぶらり 構内ショップの旅

第30回

カフェテリア@柏キャンパス の巻

金曜限定、世界各国の絶品カレー

21年前から柏キャンパスで営業を続けている「カフェテリア」。炒め物、揚げ物、煮物など5種類のアラカルト（単品¥510）が日替わりで登場する食堂です。味噌汁とライスをつければ、ボリュームがある定食に（¥710）。約100席ある店内は常にほぼ満席状態です。

一見すると普通の食堂ですが、知る人ぞ知る特別なテイクアウトメニューが。それが、不定期で金曜日に登場する世界各国のカレーです。店長の関口二三男さんが国際協力機構に務めていた時に、店長の関口二三男さん各国の在日大使館の専属シェフから直々に教わり、大使のお墨付きをもらった本場の味です。メニューは4種類。インドのムルギーカレー（スパイシーチキンカレー）とバターチキンカレー（マイルドチキンカレー）、タイのグリーンカレー（ココナッツ風味のチキンカレー）の定番3種と、毎回変わる珍しいカレーが1種。食べやすいように辛みは抑えていて、お子さんでも食べられると関口さん。毎回、数百の玉ねぎを飴色になるまでじっくり炒め、そこにトマトピューレーや香辛料、ココナッツミルクなど色々な材料を入れてひたすら煮込んでいます。やみつきになる人が多く、販売日には長い行列ができ13時すぎには完売してしまうそうです。

カレー弁当を始めたのは約2年前。コロナ禍でキャンパスに来る人が激減するなか考えた策でした。北インドのエッグカレーやスーダン共和国のレンコン炒めなど珍しいカレーが登場することもあります。販売する週は、店内にお知らせが貼り出されますが、直接確認できない人は、その週の火曜日以降に電話で問い合わせしてみてください。（tel: 04-7134-5722）



左下から時計回り：グリーンカレー（¥750）ムルギーカレー（¥780）アルカレー（¥780）バターチキン（¥750）。弁当支払いは現金のみ。営業時間●11時半-13時半。土日祝休み。

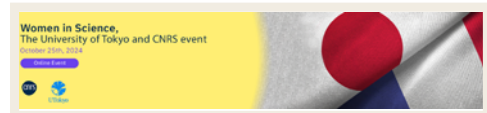
https://www.kashiwa.u-tokyo.ac.jp/blog/welfare_facilities/カフェテリア

価格は税込

#WeChange Now

第10回 ジェンダー・エクイティ推進オフィス通信

日仏女性研究者のネットワーク形成イベント「Women in Science」開催



10月25日、ジェンダー・エクイティ推進オフィスでは、フランス国立科学研究センター（以下、「CNRS」と記す）Gender Equality Unitとの共催により、ジェンダーをテーマとしたシリーズの1回目のイベント「Women in Science」をオンラインにて開催しました（使用言語：英語）。イベントでは、女性研究者が直面しているさまざまな課題に光を当て、キャリア形成とワークライフバランスの両立等への認識を共有し、理解を深めました。CNRS、東大のジェンダー・エクイティ推進に関する取組を紹介し、それぞれに所属する若手からシニアの女性研究者が対話形式で話題提供をしました。日仏の女性研究者からは、キャリア形成とライフイベントについて、研究時間と家事・育児時間の確保の難しさにジレンマを感じている状況や、職場における女性研究者の少なさがもたらす影響、ジェンダー・バイアス等の経験が語られました。他方、ライフイベント等に関する職場の同僚の理解やロールモデルの存在、また、家族の協力等が研究を継続する後押しとなったこと、就職や昇任、研究資金獲得に関して先輩や仲間からの助言に勇気づけられ、研究へのモチベーションを維持できたことなど、率直かつ活発な意見交換が行われました。

参加者はCNRS、東大の研究者を中心に約150名でした。CNRSと本学研究者の対話を通して、日本とフランスの女性研究者の置かれた立場や課題に多くの共通点があることが明らかになりました。このような状況を打開していくための方策として、個人的な問題として捉えるのではなく、組織として共通の認識を持ち課題に対応していくこと、マジョリティ側に気づきを促していくこと等の意見が挙げられました。パネリストの貴重な経験が参加者に共有され、ディスカッションを通してお互いにエンパワーされるというポジティブな影響もみられました。本イベントは、日仏両国のジェンダー・エクイティの状況を理解し、お互いの経験を共有することの重要性をあらためて認識する貴重な機会になりました。

（副オフィス長 小川真理子）

<https://wechange.adm.u-tokyo.ac.jp/>

ワタシのオシゴト 第222回

RELAY COLUMN

定量生命科学研究所 長谷川滋大
財務会計チーム 係長

生命科学の海で国際化の波に乗る



改修工事で建物も綺麗になりました

弥生キャンパスの一角に居を構える定量生命科学研究所では、その名の通り、定量性と再現性を最重要視した生命科学研究が展開されています。

そんな定量研でのワタシのオシゴトは、先生方の研究費の獲得・受入・管理・執行・報告に係る一連の手続きです。最前線で繰り広げられる生命科学の基礎研究に刺激を受けながら、今日もデスクに向かい、会議に参加し、書類を作り、ミスに気づいて泡を吹いています。

また10月29日付で、定量研が中心となり、スウェーデン・カロリンスカ研究所との間に設置したUTokyo-KI LINK Labが、東京大学の国際協創海外研究拠点の第一号に認定されました。私の仕事でも、海外の研究機関や民間企業とのやり取りが飛躍的に増加しており、国際共同研究の流れに乗り遅れないよう、勉強と実践の日々です。

そんなワタシのプライベートは、飲んだり飲んだり作ったり飲んだり。勉強と称して肝臓修行に繰り出す日々です。

たまにカクテル
メイクもします

得意ワザ：起きたい時刻を意識して寝ると大体成功する
自分の性格：石橋を叩いている間に日が暮れて焦る
次回執筆者のご指名：福代美樹さん
次回執筆者との関係：先日久々に再会した同期入職仲間
次回執筆者の紹介：優しくバツサリしごで姉さん

専門知と地域をつなぐ架け橋に

Field Study **レポ**ート!

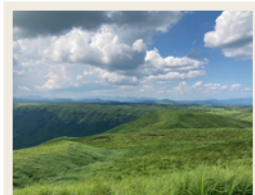
第34回



農学部3年 松原彩愛

美しい阿蘇の草原を後世に残すため

私たちは、「熊本の草原維持に向けて」というテーマで活動しています！対象地の阿蘇地域には阿蘇カルデラがあり、日本最大の草原が広がっています。しか



大観峰から見た草原

し、野焼きや放牧など人の手で維持されている草原は、ライフスタイルの変化や高齢化によって年々減少しており、消滅の危機に晒されています。そこで私たちは阿蘇地域の草原の維持の力になれるよう日々活動しています！

具体的な活動はオンラインでのミーティングと現地活動です。

ミーティングでは、自治体の方にいただいた資料やインターネットを使って阿蘇地域に関する調査を行い班員と共有したほか、調査を踏まえて大学生の立場から草原維持のためのアイデア出しをさせていただき、自治体の方に共有しました。

夏休みに行われた現地活動では、地元の方のお話を聞く機会や、阿蘇を視察する機会を自治体の方に設けていただき、阿蘇の草原への理解を深めることができました。具体的には、草刈講習への参加、熊本県・牧野組合・阿蘇グリーンストックの方々の講義への参加、世界文化遺産登録に関連する景観の視察、熊本地震の災害遺構の視察などを行いました。現地活動を通して、阿蘇の自然の美しさに感動すると同時に、改めて草原維持の難しさを実感しました。現状、ライフスタイルの変化により、草原の収益化が難しくなっており、草原の維持が大きな負担になっています。新たなライフスタイルに適応しながら伝統を守っていくところに阿蘇の草原維持の難しさがあると思います。

現地活動を終えて、今後の活動として草原維持のための募金箱の設置に取り組むことが決まりました。今後活動していく上で、募金箱がその場しのぎの対策にならないように、募金をしてくれた方に阿蘇のサポーターになってもらえるような工夫を心がけていきたい



草原に放牧された赤牛

です。あと半年弱ですが、美しい阿蘇の草原の維持に貢献できるような結果を出すために頑張っていきたいと思っています！

※メンバーはほかに松尾莉彩子（文二2年）、西野清花（文学部4年）、中山泰地（経済学部4年）

インタープリターズ・第207回 バイブル

総合文化研究科 特任准教授
科学技術コミュニケーション部門

内田麻理香

二段構えの科学コミュニケーション

いま、NHK総合でアニメ番組「チ。―地球の運動について―」が放映中である。このアニメの原作は人気を博し、第26回手塚治虫文化賞のマンガ大賞をはじめ数々の賞を受賞した。この作品は、禁断の地動説の研究に命をかける人々の生き様を描く異世界フィクションあるいはSFである。舞台は、C教という宗教が支配している15世紀のヨーロッパ。C教のもとでは天動説が正しいとされているため、地動説を研究する者は異端として拷問され、火刑に処されてしまうという世界なのだ。しかし、歴史上では地動説がこのような苛烈な迫害を受けた記録はなく、頑迷な宗教と闘う科学という単純化した構図は、熱い展開が魅力の「チ。」のストーリー上、必要なしかならうが、史実とは異なるのだ。

大人気のエンターテインメント作品だが、学術的に正しくない内容が含まれる問題は、科学コミュニケーションとしてどう考えたら良いか。「チ。」に限らず、「ポケットモンスター」シリーズでの「しんか」は、現実世界での「進化」と異なり生物学的には誤りである、などその事例は枚挙に暇がない。エンタメ作品の力は大きく、多くの人に届くため、誤解が広まったら困ると頭を抱える研究者も多いだろう。「チ。」に関しても、科学史家の方々の苦言やぼやきをSNS上で少なからず目にした。しかし、日本科学史学会は、この悩ましい「チ。」という作品に2023年度の日本科学史学会の特別賞を授与した。学会としてこの作品を退けるのではなく、協働する道を選んだことはわかる。

科学コミュニケーションには、科学の興味・関心が内輪で止まってしまうという永遠の課題がある。科学への興味・関心が低い人たちに科学の内容を届けようと、科学コミュニケーション側は四苦八苦しているのだが、これがなかなか難しいのだ。科学コミュニケーションの内側からエンタメ作品を作り、巷で大ヒットしたという事例はめったにない。これは、科学側からエンタメ作品を作ろうとしても、どうしても科学的な正しさを重視することになるため、エンタメとしての質の向上に限界が生じてしまうためであろうか。

そこで、科学コミュニケーション側は人気エンタメ作品と協働する路線をとることがある。国立科学博物館と「ポケモン」、「もやしもん」、日本科学未来館と「ドラえもん」といった具合に。エンタメ作品に「便乗」し、興味・関心の予備軍に向けて、学術への回路を開く。エンタメ作品に含まれる誤りを問題視して退けるのではなく協働するという、二段構えの科学コミュニケーションは、興味・関心が低い人にリーチできないという永遠の課題の解決法のひとつなのではないか。

ききんの「き」

寄付でつくる東大の未来

第61回

ディベロップメントオフィス
シニア・ディレクター

平野尚也

七大学×学士会で発信！ 遺贈で創る未来

遺言によって財産を寄付して社会に貢献する「遺贈寄付」をご存知でしょうか。

近年、相続人がいない等の事情や社会貢献意識の高まり等により遺贈寄付は増加傾向にあり、本学へのお問い合わせや実際のご寄付も増えています。一方で、遺贈寄付についてまだ知らない、難しそうという方も多いのが実情です。そこで9月13日の「国際遺贈寄付の日」に合わせて、国立七大学と学士会が合同で遺贈寄付セミナー「あなたの想いが未来をつくる」～大学への遺贈寄付～を開催しました。

七大学が寄付に関して行事を共催するのは初の試みです。これには、学士会会員の方に関心を持っていたきたいという理由以外に、大きな目的がありました。それは、七大学が一丸となることで「人生の最期に自身の想いのこもった財産を未来のために託す行為である遺贈寄付は、将来を担う人材の育成や新しい知の開拓によって未来を創っている大学という場所との親和性がとても高いのではないか」というメッセージをより強く発信するという目的です。セミナーでは、一般社団法人日本承継寄付協会の代表理事であり司法書士でもある三浦美樹氏を講師にお迎えし、遺贈寄付の意義や手続きについて、分かりやすく解説していただいたほか、大学ごとの個別相談会も実施しました。

当日は七大学卒業生以外の方にもご参加いただき、また卒業生も母校だけでなく大学が力を合わせて日本の教育・研究を発展させていくことに期待を寄せて下さったのではないかと思います。今回初めて実現したこの貴重な枠組みをできれば今後も維持し、大学への遺贈寄付の促進を通じたより良い未来の実現のために努めてまいりたいと思っています。

尚、東京大学基金では遺贈寄付に関する専門的な知見を備えた担当者が複数名体制でご相談にお応えしております。また12月末まで寄付遺言書作成費用の助成を受けられるキャンペーンも実施していますので、ご所属の部局に遺贈寄付のご相談がございましたらぜひ

お気軽にご
連絡ください。

遺贈寄付の詳
細はこちら↓



参加者からの質問に丁寧に回答する三浦講師（左）

トピックス 全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features, Articles)に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署・部局	タイトル（一部省略している場合があります）
10月11日	大学総合教育研究センター	気候変動への対応を考える東京大学のMOOC新講座 10月9日に公開
10月15日～	広報室	北極海の熱の動きを計測し、海氷と海水の動態を理解する＝川口悠介 アルゼンチンのインフォーマル地区で住環境改善を考える＝岡部明子 水蒸気の少ない5640mの山頂から遥か彼方の宇宙を見渡す＝宮田隆志 スリランカの老人施設に住み込み働きながら日々の営みを記述する＝中村沙絵／広報誌『淡青』49号「知の冒険者たち」
10月16日	本部学生支援課	東京大学アメフト部が明治大学に劇的勝利！
10月17日	新領域創成科学研究科	「産学協創推進室開設シンポジウム」を開催
10月18日	本部学生支援課	硬式野球部が7年ぶりシーズン2勝！
10月24日	定量生命科学研究所	ノーベル賞受賞者リチャード・ロバーツ博士講演会を開催
10月25日	本部社会連携推進課	令和6年度「東京大学稗門賞」授賞式を挙行
10月29日	本部学生相談支援課	2025年度大学卒業・修了予定者の就職・採用活動について（要請）
10月31日	農学生命科学研究科・農学部	北海道演習林創設125周年記念行事を開催
10月31日	広報室	早期宇宙の謎に迫る——深層学習を駆使した銀河の観察
11月5日	本部学生支援課	スキー山岳部・尾高さんがヒマラヤ未踏峰に初登頂！
11月5日	本部広報課	令和6年度文化勲章受章・文化功労者顕彰
11月6日	本部広報課	令和6年秋の紫綬褒章受章
11月6日	情報理工学系研究科	学生交流イベント「IST Grand Gathering 3」を開催
11月6日	柏地区共通事務センター	東京大学柏キャンパス一般公開2024を開催
11月7日	医学部附属病院	グッドデザイン賞を受賞：放射線科が新規開発した線量分布測定器
11月7日	本部国際戦略略課、本部産学連携推進課	アフリカ開銀総裁講演会とUTokyo Africa Evening開催
11月7日	本部渉外課、本部経営戦略略課、本部施設企画課	赤門周辺の歴史的環境保全事業について
11月11日	ニューロインテリジェンス国際研究機構	ヘンシュ貴雄IRC機構長が令和6年秋の外国人叙勲 旭日中綬章を受章

本年秋の褒章について

江頭憲治郎名誉教授（法学政治学研究科・法学部）、廣川信隆名誉教授（医学系研究科・医学部）が、令和6年度文化勲章を受章しました。また、菅野和夫名誉教授（法学政治学研究科・法学部）、五味文彦名誉教授（人文

社会系研究科・文学部）、辻井潤一名誉教授（情報理工学系研究科）、羽田正名誉教授（東洋文化研究所）が、令和6年度文化功労者として顕彰されました。そして、藤田友敬教授（法学政治学研究科・法学部）、岩坪威教授（医学系研究科・医学部）、石原あえか教授（総

合文化研究科・教養学部）、中畑雅行教授（宇宙線研究所）が、令和6年秋の紫綬褒章を受章しました。

この度は誠にありがとうございます。ゆかりの先生が執筆した紹介記事とお写真はウェブでご確認ください。

表紙について

今号の表紙は、11月7日～11日に工学部2号館と情報学環オープンスタジオで開催された東京大学制作展 2024「付いて離れて」（主催：情報学環・学際情報学府）から、キャンパスに点在する「帝大下水」マンホール蓋のデザインを余すところなく紹介した作品「Whole Teidai Gesui Catalog」の一部です。

作者は博士課程2年のあんどやすしさん（横山研究室）。7月に行われたプレ展示ではマンホール蓋の拓を取ってTシャツ化する作品を展示しましたが、今回は構内で見つけた80基を形態別に8種（A1,A2,B,C,D,E1,E2,F）に分類して写真で紹介するカタログを作成して示しました。作者が分類の基準にしたのは、蓋の直径、取手の位置、セルの大きさ、

文字の向き、穴の有無と配置の仕方……。表紙には、その8種に加え、白金台キャンパスで後から発見したという1種（G）も掲載しました。あんどさんのウェブサイト「帝大下水」（<https://teidaigesui.tokyo>）では、構内の配置マップやマンホールクイズも楽しめます。キャンパスを歩く際、普段はあまり気に留めない足下に目を向けてみませんか。



黄葉の銀杏並木と安田講堂の絵画！

青空の下、黄葉の銀杏並木の先に安田講堂の建物が見える、本郷キャンパスの象徴とも言える美しい風景をタオルハンカチにしました。一度織り上げた織物を経糸に沿ってカットし、横糸として再び織り上げた、スコットランド発祥の伝統的なシェニール織で作られています。優しい肌触りで華やかな発色の、絵のようなタオルです。吸湿性が高く、激しい洗濯にも耐える実用としてだけでなく、お部屋に飾るインテリアとしてもお楽しみいただけます。（渡）



UTCCからのお知らせ

シェニール織
タオル
ハンカチ
28×28cm

¥3,800（税込）



→オンラインストア



CLOSE UP 北海道演習林の125周年記念行事を開催

(農学生命科学研究科・農学部)



10月11日～12日、北海道演習林の125周年記念行事を開催しました。11日、樹木園で藤井輝夫総長が記念植樹(①)を行った後、富良野市文化会館サンエーホールにて記念式典・講演会を実施。中嶋康博農学生命科学研究科長の挨拶、総長式辞に始まり、林野庁北海道森林管理局長、北海道水産林務部長、富良野市長からご祝辞を、脚本家の倉本聰氏からは当演習林第5代林長・高橋延清との逸話を交えたお祝いビデオメッセージを頂戴しました。続いて、演習林の木材生産を支える麓郷木材工業株式会社と相田木材株式会社に感

謝状を贈呈。講演会では、演習林の技術専門職員と地元の写真家が、北海道演習林の歴史や取り組み、自然に関して語りました。当演習林と共同研究契約を締結したリュブリャナ大学(スロベニア)のアンドレイ・ボンチーナ教授は、「近自然林業の歴史・現状・展望：スロベニアの教訓」と題する講演を行いました(②)。12日の見学会(③)では、苗木育成や林分施業法を実践する択伐林、ウダイカンバなどの広葉樹の管理、製品丸太の生産といった取り組みを案内し、カツラの巨木や湧き水などの自然景観をお楽しみいただきました。



CLOSE UP ノーベル賞受賞者ロバーツ博士の講演会を開催

(定量生命科学研究所)



真核生物のイントロンと遺伝子組み換え技術の発見の功績で知られるロバーツ博士

10月9日、本郷キャンパスの小柴ホールにて、1993年ノーベル生理学・医学賞受賞者のリチャード・ロバーツ博士による講演会を開催しました(主催：定量生命科学研究所・国際戦略企画室事業運営WG 後援：New England Biolabs)。約150名が参加した講演会では、「The Path to the Nobel Prize」と題し、博士のキャリアや研究内容をはじめ、科学に興味を持つようになった子供時代の話、

研究者としての姿勢や大学院修了後の進路のアドバイス等、多岐にわたる内容をお話いただきました。講演後に実施された藤井輝夫総長との対談では、研究者に必要なマインドセットや大学での女性の活躍推進等、様々なトピックに関して活発な意見交換が行われました。ロバーツ博士への質疑応答の時間も設けられ、参加者から多数の質問があり、時間の許す限り多くの質問に回答いただきました。



CLOSE UP スキー山岳部・尾高さんがヒマラヤ未踏峰に初登頂!

(本部学生支援課)



日本山岳会学生部ブンギ遠征隊のメンバー
／左上が尾高さん(農学部3年)

10月12日、本学運動会スキー山岳部の尾高涼哉さんを含む日本山岳会学生部ブンギ遠征隊が、ヒマラヤ山脈の未踏峰に初登頂する快挙を達成しました。メンバーは東京大学、青山学院大学、立教大学、中央大学に所属する学生5名です。これまでに人類が登頂したことのない、ネパールのアンナプルナ山域、ペリヒマール山群に属するブンギ峰(標高6524m)への登頂に成功しました。

昨今ではどの大学の山岳部も部員が少なく、単独での海外遠征が困難なため、日本山岳会の学生部を通じ、ヒマラヤの未踏峰に登りたい同世代の仲間を求めて生まれたのが今回の遠征隊だったそう。「大学山岳部全盛の時代は過ぎ去って久しいですが、それでもまだ青春を山に捧げている若者がいるんだという事を、今回の挑戦を通してより多くの方に知ってほしい」と尾高さんは語っています。

150周年記念の150円特別メニューが登場!

12月2日～6日、150周年記念協賛事業の一環として、中央食堂と駒場食堂に特別メニューが登場します。協賛企業の支援を受け、本来650円のところを150円で学生に提供するもの(1日各200食限定)。駒場井は、2018年に学生組合員からアイデアを募集して開発・提供されていたもののリバイバル。駒場の緑を表すレタスとサルサソース味の挽肉炒めに黄色の銀杏を表すチーズを載せています。スパイスカレーは、東大スパイス部の学生と生協食堂部が共同開発した本格メニューで、初代部長によればカルダモンの風味が効いた「サワカラ」(爽やかな辛さ)が特徴。11月にはコラボメニュー「スパイス香るスープカレー」を共同開発したスパイス部による自信作です!



協賛 / Sky株式会社
11月8日にはメトロ食堂で試食会を実施。津田敦理事がスパイス部にカレー作りの指南を仰ぐ場面も。

小石川植物園のギンナンがIncluDEへ!

11月11日、小石川植物園の環境整備チームから多様性包摂共創センター(IncluDE)の皆さんへギンナンの実が贈呈されました。園内で拾い、皮むき・洗い・乾燥・袋詰めまで丁寧に仕上げたもの。例年は園の来場者に配っていますが、今年は新しい試みとして、IncluDEの伊藤たかねセンター長、松田雄二バリアフリー推進オフィス長、D&I担当の松井正一副理事に、ギンナンと調理法メモ、作業を紹介する書籍『植物園の仕事 勝弘さんの1日』(埼玉福祉会)を渡す場が設けられました。お薦めの調理を尋ねた伊藤先生。チームからの答は、やはり茶碗蒸しでした。



①本部棟前にて。②チームの皆さんと植物園長の川北篤先生。③かなり大粒な小石川産ギンナン。



76歳の娘へ

つい先日娘が産まれました。子を持つことがどのようなものなのか、今まさに経験しています。2024年生まれだなんて、未来人みたい、すごい！76年後に、76歳になった彼女は、2100年の世界を生きているのですね。私はこれまで、22世紀はタイムマシンの世界に過ぎないと思い込んでいました。しかしどうやら、22世紀は現実・存在しているようです。だけれども私には、76年後の世界を具体的なものとして想像することは、とても難しい。1948年のあなたは、2024年の今をどのように思い描いていただろうか。

現代の生命科学が、純粋な好奇心に基づいた偶然の発見の積み重ねの上に成り立ってきたという科学史観は、あながち的外れではないだろう。インディアナ大学で博士号を取得したばかりのJames Watsonは、1950年9月、バクテリオファージの核酸合成酵素の生化学解析を行うコペンハーゲン大学のHerman Kalckarのもと、Merck Fellowとして研究を開始した。しかし、核酸代謝の研究に興味を持てなかったWatsonは、1951年10月、ケンブリッジ大学キャヴェンディッシュ研究所に移る。そこで偶然にFrancis Crickと出

会い、後にDNA二重螺旋構造を見出すこととなる。このときMerck Fellowshipを所管するNational Research Councilは、Watsonの研究計画の変更を認めなかった。その結果、彼のMerck Fellowの資格は途中で打ち切られてしまうことになる。分子生物学の礎ともいえるDNA二重螺旋構造の発見は、知的好奇心に駆られた若き日のWatsonの、まさに「寄り道」の産物であったといえる。現代の「選択と集中」型の科学予算政策、あるいは近視眼的な出口戦略を掲げる応用研究の偏重は、未来への投資としてどれほど有効なものだろうか。

私は、私の娘が生きる2100年の世界を見てみたいと、心から思う。76歳の彼女と話をしてみたい。調子はどうですか？元気にやっていますか？無理をせず、健康に気をつけて暮らしてくださいね。お父さんは今、2024年の東京で、ハエの卵を顕微鏡で眺めています。ひとの役に立つかわからなけれど、割と楽しいですよ。

深谷雄志
(定量生命科学研究所)

※Merckは世界的な化学・医薬品メーカー

